主 文

本件再審査請求を棄却する。

理 由

第1 再審査請求の趣旨及び経過

1 趣 旨

再審査請求人（以下「請求人」という。）の再審査請求の趣旨は、労働基準監督署長（以下「監督署長」という。）が平成〇年〇月〇日付けで請求人に対してした労働者災害補償保険法（昭和22年法律第50号）による遺族補償給付及び葬祭料の支給に関する処分を取り消すとの裁決を求めるというにある。

2 経 過

請求人の亡夫（以下「被災者」という。）は、平成〇年〇月、A市所在のB運輸（以下「会社」という。）にトラック運転手として雇用されたが、平成〇年〇月〇日、退職した。その後、同年〇月〇日、会社に再雇用され、トラック運転手として勤務していた。

被災者は、平成〇年〇月〇日午前0時20分頃、トラックの運転席でぐったりしているところを発見され、心肺停止状態でC病院に救急搬送されたが、同病院で死亡が確認された。死体検案書によれば、直接死因は心筋梗塞であった。

請求人は、被災者の死亡は業務上の事由によるものであるとして、監督署長に遺族補償給付及び葬祭料を請求したところ、監督署長は、被災者の死亡は業務上の事由によるものとは認められないとして、これらを支給しない旨の処分（以下「前回処分」という。）をした。

請求人は、前回処分を不服として、労働者災害補償保険審査官（以下「審査官」という。）に審査請求を行ったところ、審査官は、被災者の死亡を業務上の事由によるものと認め、前回処分を取り消す旨の決定をしたため、監督署長は、被災者の死亡は業務上の事由によるものと認めた上で、給付基礎日額を〇円と算定して、遺族補償給付及び葬祭料を支給する旨の処分（以下「本件処分」という。）をした。

請求人は、本件処分の給付基礎日額を不服として、審査官に審査請求をしたが、

審査官は、平成〇年〇月〇日付けでこれを棄却したので、請求人は、さらに、この決定を不服として、本件再審査請求に及んだものである。

第2 再審査請求の理由

(略)

第3 原処分庁の意見

(略)

第4 争点

本件の争点は、遺族補償給付及び葬祭料の支給に関する処分における給付基礎日額が監督署長において算定した〇円を超えるか否かにある。

第5 審査資料

(略)

第6 事実の認定及び判断

1 当審査会の実事の認定

(略)

2 当審査会の判断

- (1) 請求人らは、意見書(3)において、要旨、①被災者の休憩時間について、仮に休憩時間があったとしても、せいぜい30分程度と推定すべきである、②被災者の終業時間について、被災者は高速代の精算等の業務を行っており、会社事務員が出勤する午前9時まで就労していたみるべきであるとし、①及び②に基づいて時間外労働時間数を認定し直し、給付基礎日額を算定すべきである旨主張しているため、以下に検討する。
- (2) まず、①については、被災者とほぼ同じ配送コースを回っていた同僚Dはその聴取書において、「休憩時間はだいたい1時間は取れていましたし、もっとたくさん休憩できることもありました」、「休憩も最低1時間位はできますので、そんなにきつい仕事だったとは感じていません」と申述していること、また、E社長の申述からしても、被災者は最低1時間の休憩時間を確保していたとみるのが相当である。
- (3) 次に、②については、E社長は聴取書において、「(被災者は)午前8時から8時半くらいに、帰社してすぐに帰宅していました」と述べていること、また、仮に請求人らの主張するように立て替えた高速代を精算するため午前9時頃まで事務員を待っていたとしても、その必然性に疑問が生じるところであり、そ

の待ち時間が直ちに事業主たるE社長の指揮命令によるものであり実態としての労働時間であると判断するのは困難であることから、午前9時までを被災者の労働時間とみることは妥当ではない。

(4) さらに、本件の一件記録を精査するも、請求人らの上記主張を客観的に裏付けるに足る資料は認められず、請求人らの同主張は採用できない。

3 以上のとおりであるので、被災者の給付基礎日額を〇円と算定して、遺族補償給付及び葬祭料を支給した監督署長の本件処分は妥当であって、これを取り消すべき理由はない。

よって主文のとおり裁決する。